銃後

青柳岩吉（宮本・63歳）

昭和二十年二月、甲種合格。徴兵検査が終り控室に帰っても未だ誰も居ない。嬉しいようでもあり淋しいようでもあり感無量だった。

当時、某無線局に勤めていた私は三月九日が宿直であった。外国放送では日本に対し盛んに終戦を呼びかけていた夜中、空襲警報が発令され、間もなく東京方面の空は夕やけのように真っ赤に染り、東京下町は大空襲を受けた。

この晩のB29は今までにない低空飛行で悠々と九十九里方面東方海上に飛び去る姿は米軍の余裕さえ感じられた。

この真っ赤に焼けた空は薄れることなく四日間も続いたことを記憶している。

数日後、我が無線局も小型機による機銃掃射を受け、窓からの銃弾は室内を二回も飛び散り恐怖に戦いたが幸いにも犠牲者は無く、間もなく終戦となった。我々は戦争の体験を生かして永久に平和を維持しなければならない。